



## あの日のあの川 リレー日記 ～第13話～



あの日のあの川  
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

### 第13話主人公 高鳥 圭亮

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 4年 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：茨城県宮田川)

### 「随筆：上高地」

いつのこと？：大学生

どこの川？：梓川

僕が旅に出る理由はだいたい百個くらいあって……

そんなにあったっけかな？とにかく私は一人旅に出たのだ。目指すは長野、上高地。とにかく、現実味のない場所へ行きたかった。周囲との人間関係の面倒くさいところをたくさん抱えていた大学3年の初秋の話である。

上高地は北アルプス槍ヶ岳に源を発する梓川が形成した堆積平野で、国の文化財にも指定されている景勝地である。山・森林・川といった風景に加え、温泉やキャンプ場などもあり、年間150万人もの人々が訪れ賑わいを見せている。

私は鈍行を乗り継ぎ、新島々駅からバスで、ゆっくりと向かっていった。リュックサックには余計なものばかり詰め込まれていた。高速化する観光はどうしても好きになれない。旅は道程に価値があって、時間があるのならば時間をかけていきたい。人との旅行ではこんな我儘、言えないけれども。

スローに移り変わる車窓からの風景と、iPod から流れる音楽が溶け合い、うんざりする日常からの脱出が一時的だけれどもそこにはあった。

そうして行き着いた9月の頭の上高地では、まだ夏の姿を残しつつも蝉の声ひとつ聴こえず、文字通りの「森閑」を感じさせてくれた。梓川右岸の遊歩道を踏みしめてゆき、大正池から数kmの間に次々と風景は形を変えてゆく。山地帯と亜高山帯の境界に位置する上高地では、落葉広葉樹林と針葉樹林が混在し、加えてヤナギやカラマツなど河川林もみられ、豊かな植生が眼前に広がる。そして何より、梓川。明鏡止水——厳密に言えば川は流れているのだが——水面は実に穏やかだった。穏やかで清澄な梓川には、それだけではない一面も持っていた。林の中を流れる梓川は、植生やプランクトンのせい、ところどころ緑から紺のグラデーションを形成している。「綺麗」と一言で片づけることもできるだろう。しかし、それはどこか混沌としているようにも見え、自然の生み出すある種の狂気を孕んでいるように私には感じられた。それは今思えば私の知覚のある種のエゴだったかもしれない。すっかり淀んでいた自分の心境を、逃避地としてのここに代弁して欲しかった…なんてね。

風景写真家を一種の芸術家として考えると、殊に知覚に優れた存在なのではないだろうか。誰もが同じく見えるはずの「風景」に意味を見出し、切り取り、作品として残す。情景に自分の感覚を反映させる印象派の絵画とは旨趣が違ふ。自分も今では一眼レフのカメラを所持しているが、センスが無いためなかなか良い写真を撮ることが出来ない。

上高地のマガモたちは人間を恐れない。ここは浮世からちょっと離れた場所。私は明神池近くの売店で塩焼きの鮎を買ひ、梓川を腹に放り込んだ。自然から着想を得てあれこれ思索することは好きだ。旅に出る理由なんてそれで充分かもしれない。この地を開拓した登山家ウォルター・ウェストン卿は何を想っていたのだろうか。私は、日常への帰路へ就いていた。



(次は向田隼さんにバトンを託します)